

パネラー報告 3 —牧口常三郎の国家観・世界観—

小 出 稔

『人生地理学』を初めて読んだ時に、少々の戸惑いと驚きがありました。古い言葉で読みにくいというものはあるのですが、それ以上に、牧口先生が使われている概念や用語に違和感を覚えました。私は1962年生まれ、戦後世代です。私が受けたいわゆる戦後民主主義教育の中では、平和とか人権、その他、社会のあり方を語る時は、無意識に国家というものを、人間の自由と対立する主体として捉える傾向があると思います。いわば、認識の大前提として、国家は悪であるというような。そのような認識に慣れ親しんできた自分が『人生地理学』を読むと、少々、牧口先生の使われる言葉に対して戸惑いを覚えました。『人生地理学』で牧口先生が社会や人間生活のあり方を論じる時は、国家というものをとても大きな前提にしている。牧口先生は、何か国家の役割を積極的に肯定している国家主義者なのではないか、と誤ってしまいそんな箇所も率直に言いますと、たくさんありました。そんな驚きと戸惑いの連続で、初めて『人生地理学』を読んだときには、理解するというよりも、疑問の方が多く出てきて、あわててもう一回読み直す、という感じでした。

実は、牧口先生については、言われているような平和思想家、運動家ではなく、国家というものに対して、大変迎合的であったというような論文を海外の研究者が出したことがあります。結論から言ってしまうと、これは大きな認識の誤り、誤解であると思います。けれども、牧口先生が『人生地理学』を著された当時の社会問題に対する一般的な認識方法や叙述の仕方を十分考慮に入れずに読むと、そのような誤解はありうると思います。そして、創価大学としても、しっかりと牧口先生の思想を研究して、そういう表面的な理解や誤解に対しては、しっかりと反論出来る成果を出していかなければならないと思いました。

先に述べましたように、戦後の教育に慣れていると、国家イコール権力、そして権力イコール悪。平和運動は悪い権力と戦うのだから、当然国家に対しては批判的なスタンスを取るべきである、という三段論法的な認識をすることが多いと思います。ところが、牧口先生の思想を理解するに当たっては、国家に対する姿勢といわゆる権力に対する姿勢、これをよく注意して分けて考えるべきではないかと思えます。牧口先生は国家の役割ということについては、具体的に生きている人間が、幸せになるための環境を提供する重要な機関である、というように位置付けをされています。

誤解を恐れずに述べますと、戦後の民主主義教育の中の人間像は、国家から自由な、いわば、宙に浮いた、抽象的な人間像である。そのような人間の抽象的理想像を前提として、権力から干渉を受けるべきではない人間の根源的自由、すなわち表現の自由、思想の自由、良心の自由、信教の自由等々の価値を訴える意義は確かにあります。戦前に極端な国家主義を経験した日本が、戦後においてそのような抽象的人間像から出発することには十分な意義がある。しかし、

そのような抽象的人間像の持つ意義を認めたくらうと、理念としての人権を現実の生活の中で具現化しようとするれば、やはり社会そして国家というものが重要になる。社会で生きる個々人の思想、信条、良心、信教の自由を守ろうとするれば、また、学問の自由を確保しようとするれば、さらにまた、人から物を盗まれたりとか、自分の生命や財産を脅かされたりしないで、安心して生活するためには、現実の国家の役割や機能というものを無視できない。牧口先生はそのような視点から、国家というものに対して、大変に詳細な分析をされています。

このような牧口先生のアプローチを戦後民主主義の立場から見ると、「人間の権利を考えるに当たって国家というものを前提にしすぎている」、「人権は国家に依存するものではなく、むしろ国家の前提であるべきだ」、さらには「牧口は国家主義者であった」などという批判があり得ると思います。しかし、これは牧口先生の議論の字面だけをおった、浅薄な批判であると思います。牧口先生の活躍された当時、社会のあり方を議論する際に使われた認識や用語を踏まえたくらうと、正確に『人生地理学』を読めば、牧口先生の人間主義的社会観や国家観が理解できると思います。

『人生地理学』の中で、牧口先生は国家の役割として、4つの面を挙げられています。これは今日の国家観でも、大体国家の役割は、この4つの機能にまとめられるのではないかと思います。1つは、内憂に対する保護的活動。すなわち、国内の治安の維持、安定した社会秩序をもたらすという国家の機能です。2つ目が、外患に対する保護的活動。これは要するに、他の国から侵略されずに、国の独立を守る国家の機能です。この機能がどうしても、牧口先生の時代には、強調される傾向がありました。『人生地理学』が出版されたのは1903年（明治36年）です。前年にイギリスと日英同盟を結んで、そして、続く1904年には日露戦争があった時代です。要するに1903年とは、日本の国中が、いわば国運を賭した大戦争に向かう時代でありました。ヨーロッパに目を転じれば、イギリス、フランス、ドイツ等のいわゆる列強諸国の間の勢力争いが、植民地獲得競争を通じて激化し、そういう背景の下で、国際社会が、いわば生き馬の目を抜く競争的な時代だった、という風に言えると思います。

また、牧口先生が『人生地理学』を著された時には、社会科学の分野に於いても、いわゆる生物学で唱えられたダーウィンの「適者生存」という考え方、すなわち一番環境に順応出来た者が生き残っていく、という考え方ですけれども、これが社会科学の分野にも適用され、進歩をもたらす一つの考え方として盛んに喧伝されておりました。今日の我々の人権感覚からすると、「適者生存」という法則に従った社会の進歩は、非人道的な側面が多いと思います。けれども、当時の学問的な風潮の中では、いわゆる競争というものが、肯定的に捉えられていた側面があります。国家の間でも、競争が強調され、その競争に負ける国には未来は無いという、そういう考えが一般的に「進歩的」と受け入れられ、実際に国際政治の中で実践されていた時代でした。そういう環境におかれた国家が、自国民の生活の安寧を守ろうとするれば、必然的に外国との競争に負けてはいけないのだと、そういう発想から、国家の2番目の機能として外患に対しての保護的活動が挙げられているのだと思います。

ただ、実際に『人生地理学』（文庫本）を紐解くと、最初の内憂に対する保護活動についてはわずか数行で議論を終え、また次の外憂に対する保護活動についても、せいぜい1ページが割かれているだけです。つまり、これら2つの国家の機能については、牧口先生は極めて簡単に触れるにとどめている。そして、むしろ残る国家の2つの機能について、約8ページのスペースを割いて牧口先生は議論されています。

牧口先生の指摘する国家の3番目の機能とは、国家の個人に対するサービスという機能です。

そして、最後の機能は、国民の生活に対してその幸福の増進を図る活動、とされています。国家の3番目と4番目の機能は、極めて20世紀後半的な機能であり、日本においても第二次世界大戦後に、ようやく、生存権であるとか、社会保障、社会福祉等が進められる中で実現してきたものです。牧口先生は、いわば50年も時代を先取りして、国民のための国家というものを追及していた、そのように理解できると思います。

牧口先生の生きられた時代は、現実問題として弱肉強食の側面もある国際社会に国家は直面していました。そのような環境の下で、国家は互いに競争をせざるを得ない面がありました。けれども牧口先生は、国家間の生存競争にしても、飽くなき利益の追求、その結果の冷徹な勝者・敗者の決定というような形態ではなく、これは有名な話ですけれど、人道的競争という形式を、いわば国際社会の目指すべき一つの目標として、牧口先生は志向されておられました。

この人道的競争については、このあと、塩原さんから詳しくお話があるようですので、私の方は極めて簡単にまとめます。人道的競争とは、独立した人道という分野での競争というではありません。軍事や政治、さらには経済や科学技術などの個々の分野で、国家は競争を繰り広げています。ある意味で、人間の生活そのものが、他者との競争という側面を含んでいる。人類の活動のあらゆる分野で、競争という形態の活動があることは否定出来ない。すなわち、国家間においても、競争という関係は、否定できない現実である。

しかし、その競争というのは、勝てば何でも許される、強ければ全てを得られる、そういう競争であってはならない。自他共に利益を得られるような、そういう競争にならないか、と。これを牧口先生は人道的競争と呼びました。『人生地理学』を著された当時、牧口先生は33歳か34歳くらいですから、若い青年として、そのような人道的な世界の実現を望まれていたのではないかと思います。

この人道的競争を指導する原理というものをもとに求めるということが、『人生地理学』以降の牧口先生の大きな学問的な関心・テーマとなっていくのではないかと思います。

『人生地理学』の冒頭の「地と人との関係の概観」という部分で、牧口先生は端的にご自身の世界観・国家観をまとめられています。『人生地理学』を読んだことのある方はご存知だと思いますが、牧口先生は、ご自分の身の回りを観察され、自分の周囲にある物が実は、世界中のさまざまなところの産品であることを指摘されます。それらの事実は、自分が世界の中で色々な人の恩恵を受けて生きていることを示している。つまり、自分は世界市民、そういう言葉は使っていませんけれども、世界という空間の中で生きている一人だ、と牧口先生は述べられます。

しかし、だからと言って、何か漠然と自分は世界の中で生きているのだと言っても、それでは人間の生活の実態というものを把握することは出来ない。そして、より具体的な単位として、やはり国家という枠組みの中で、我々は具体的な生活を営み、社会的な制度を作っている。その意味で、自身を取り巻く社会全体から受けている恩恵というものを忘れては、やはり具体的な人間の生き方というものは示すことは出来ない。そして、さらに言えば、国家という単位も、まだ大きくて、本当に人と人との関係、自分の人生のあり方等を理解するに当たっては、自分が生活している故郷という言葉が使われていますが、まさに自分たちが生きている現場でのさまざまな人間相互、そして社会と人間との関わり方を理解すべきではないか、と牧口先生の議論は進みます。

結局、人間とそれを取り巻く環境を不可分のものとして捉える牧口先生の視点は、『人生地理学』というタイトル自体に端的に示されています。国家といい、世界といい、それらは抽象

的な存在ではなくて、生身の人間が生きている空間として捉えてこそ意味があり、また人間の存在自体も、そのような環境と共に理解してこそ、内実を伴う真の人間像が浮かび上がる。つまり、国家や社会のあり方は、人間のあり方と不可分であり、人間を観察してこそ、国家や社会のあり方は導かれる。人間は一体何なのか、人間とは、一体何のために生きているのか、このような問いに答える哲学的基盤を持ってこそ、人間が生きる空間としての国家観・世界観というものが導かれる、と。そのように牧口先生は考えられていたのではないかと思います。

そう言う意味で、最終的に、牧口先生の国家観・世界観の研究は、牧口先生の人間観そのものに収斂していくと思います。しかし、これは私の今回の発表の守備範囲を越えてしまうので、ここでは、ごく簡単に、次の牧口先生の『創価教育学体系』の言葉を紹介するにとどめます。すなわち、牧口先生は最終的に国家の目的は、「個人の伸びんとするところ、個人の幸福と一致すべきである」と、結論づけられています。簡単ですが、以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。